なごや文化情報

2024
Autumn

No.411

NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery／GALLERY APA
随想／ILL TOKAI UNDERGROUND主宰 八代将弥さん
この人と…／日本舞踊家 五條流理事 五條園美さん
視点／アール・ブリュットの時代〜福祉レジームとアール・ブリュットの成立〜
＃zoom up／歌人 野口あや子さん

公財団法人 名古屋市文化振興事業団

2024
Autumn

表紙

「天神」

（2013年／H21.8㎝×W16.5㎝×D8.5㎝／木曽桧、胡粉、絵具、煤液、銅板、金箔）

故・初代堀安右衛門師が淘汰を重ねた最高の面を眼の前にすると幸福感に包まれ、そしてスイッチが入る。こうなると万事全てのことが後回しとなる。

黒蕨安孝（くろわらびやす たか）

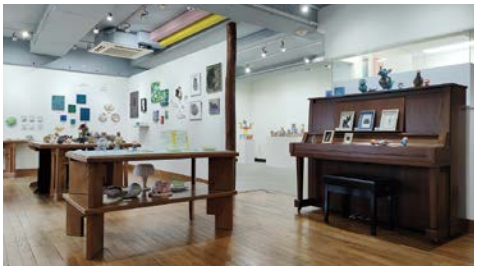
1995年　「黒蕨孝子能面展」（信濃デッサン館槻多庵）
2001年　「能·狂言面大賞21 優秀賞·佳作受賞」（横浜能楽堂）
2008年　「現代能·狂言面作家展」（早稲田演劇博物館）
2012年　「中村光江·黒蕨安孝の能面世界～花のかたち～」（名古屋能楽堂）
2017年　「堀安右衛門と弟子たちの能面世界」（名古屋能楽堂）
2023年　「黒蕨安孝の能面世界」（名古屋能楽堂）
　　「能面五人展-感情の妙を求めて-」（名古屋能楽堂）
2024年　「名古屋能楽堂寄贈能面展　黒蕨安孝の能面世界」（予定）（名古屋能楽堂／11月1日～11月29日）

Contents

Pick Up Gallery　GALLERY APA……2
随想　ILL TOKAI UNDERGROUND主宰
　　八代将弥さん……3
この人と…　日本舞踊家 五條流理事 五條園美さん……4
視点　アール・ブリュットの時代
　　～福祉レジームとアール・ブリュットの成立～……8
＃zoom up　歌人　野口あや子さん……10

「なごや文化情報」編集委員
杵屋六春（長唄·唄方 名古屋音楽大学講師）
桐山健一（舞踊·演劇ジャーナリスト）
黒田杏子（ON READING）
鈴木敏春（美術批評·NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事）
濵津清仁（指揮者）
望月勝美（編集者·ライター）

Pick Up Gallery



内観写真

GALLERY APA（ギャラリー アパ）

GALLERY APAは1992年にオープン。先代である亡き父の時代には国内外の著名作家の展示、また若手作家を育てる支援もしておりました。現在は、場所を隣の建物に移し、「アートをもっと身近に」をモットーに、メインルーム、ファインルームにて地元の作家を中心に、年間約30本の企画展を開催しております。また、マルシェスペースを設け、30名ほどの作品、約150点を常設展示し、展覧会以外の作品もお気軽にご覧いただけます。また、ワンコインで作家オリジナルの作品が入手できる、大人気の「アートガチャ」もあります。これをきっかけにアートの楽しみ方が見つかるかもしれません。

設　立　1992年　代表　渡邊見美
住　所　〒467-0003　名古屋市瑞穂区汐路町1-14 2F
電　話　052-842-2500

取り扱い作家　ニシムラマホ、橋寛憲、山田明広、島崎弥佳子、大杉好弘、浅田泰子、藤原史江、モハメド·イクバル ほか
ウェブサイト　http://www.gallery-apa.com

随想

文化や芸術について

ILL TOKAI UNDERGROUND 主宰

八代将弥（やしろまさや）

2010年より演劇活動を始め、「視点」「狭間」「遊び」をテーマに演劇を創作。脚本家、演出家としてジャンルを問わず依頼を受けて活動。人間の表裏を描く脚本と、俳優の個性を際立たせる演出を得意とする。劇作家協会東海支部が創設した東海圏初の俳優賞である「俳優A賞」の第1回受賞者。2024年に名古屋市文化振興事業団第40回芸術創造賞を受賞。

名古屋を拠点に脚本、演出、俳優をしているILL TOKAI UNDERGROUNDの八代将弥です。「文化」や「芸術」について徒然なるままに書き連ねてみようと思います。

私は令和6年の秋現在38歳で、演劇はかねがね15年程やっています。これまで自分のやっていることが「文化」であるとか、「芸術」の一端であると実感したことは一度もございません。そんな風に思うことが小っ恥ずかしいのです。ましてや、自分のやっていることが「芸術」だと口にしようものなら、周りにクスッと笑われてしまうのではないかと考えると恐ろしくて、そんなふうには決して思わないように、積極的に遠ざけているところもあるのかもしれません。また「文化」や「芸術」という言葉はどこか高尚なイメージがあり、私のような遊び感覚で演劇をやる者としては、触れ難い言葉でもあります。私なんぞが「文化」をやり、「芸術」を名乗った瞬間、私の創作フォームは崩れ、私の理想とする演劇は舞台の上から消え、二度と姿を現さないのではないかと思うほど、「文化」や「芸術」とは“デンジャー”な存在だと感じています。

しかしながら、人様に「文化」とか「芸術」として認識してもらえる分には、満更でもない、というより、ちょっと言ってほしい気持ちすらあります。つまり私にとって「文化」や「芸術」とは他者に伝播し、他者によって伝播されるものなんだろうと思います。私のように、演劇を遊びとして捉え、ユーモアを含むものを目指す創作が「芸術」なんて言ってもらえたり、演劇「文化」の一つとして受け取ってもらえたら、私としては最高です。そういうものを私は創りたい。と同時に創れなくてもそれはそれでいい。…ということも含め、「文化」や「芸術」として認識してもらえたらいいなと私は思います。

演劇を長く続けていると、私のような軽率な人間でも、幸運なことに、人に褒めていただけたり、賞をいただけたり、このように執筆依頼が来たりということがあるわけです。本来ですと、博学ぶりを披露したいのですが、持ち合わせていないので無理です。だから恐縮しつつも同時に、こういう私みたいな奴を面白がってくれたりする側面があるのが「文化」や「芸術」だとも、やはり信じたい。

難しいことは難しいことができる人に任せる。私は私のフォームで、誰かに、何かを伝播させ、私を含め、誰かを肯定したい。それでは、劇場でお会いできますよう。

この人と…

日本舞踊家　五條流理事

五條園美（ごじょうそのみ）さん

古典と創作、どちらも大切に

歌舞伎から生まれ、豪華な舞台装置、衣裳をまとい、三味線音楽に合わせて華やかに舞う日本舞踊。西洋で例えるならバレエだろうか。有名な演目も多く、「京鹿子娘道成寺」「鷺娘」「藤娘」などは、舞踊家ならばいつかは踊ってみたい名作である。そんな演目を幼少期から踊り、古典だけでなく創作舞踊も数多く手掛けてきた五條園美さん。平成3年度名古屋市文化振興事業団第7回芸術創造賞、平成5年度名古屋市民芸術祭賞、平成9年度名古屋市芸術奨励賞、平成18年度愛知県芸術文化選奨等を受賞。令和5年度には、代表を務める創の会が前年に上演した「創作舞踊劇『幻想 平家物語』」が評価され、名古屋演劇ペンクラブ賞も受賞している。

若手舞踊家の育成にも力をそそぎ、今もなお舞踊家として第一線で活躍を続ける五條さんにお話を伺った。

（聞き手：杵屋六春）

生い立ちと日本舞踊

名古屋大学の教授だった父（佐藤一夫さん）と、日本舞踊家の母（五條流理事・五條珠園（たまその）さん）の長女として生まれました。私の妹は幼くして亡くなり、寂しい気持ちが少しでも紛れたらと考えた父の勧めもあって、戦後、母は私に日本舞踊を教えるようになりました。五條流初代家元の五條珠實（たまみ）先生は、名古屋の西川鯉三郎先生が使用していた稽古場をお借りして東京から稽古にいらっしゃっていましたが、戦後は我が家でもお稽古してくださるようになり、3歳頃より珠實先生と母の両方から手ほどきを受け始めました。

「浦島」の衣裳（7歳）

不思議な話がございまして、戦時中、鯉三郎先生が使用していた稽古場の所作台（日本舞踊で足のすべりをよくし、足拍子の響きをよくするために敷く檜板）は、稽古場の持ち主の方が疎開先に持って逃げたそうです。ところが、戦後めぐりめぐって、その所作台が父の同僚のお宅に保管されていたことがわかりました。そこで、我が家の稽古場に引き取らせていただくことになりました。珠實先生に引き寄せていただいたご縁だと思い、今も大切に使っています。

初代五條珠實先生は、名優と謳われた歌舞伎俳優六代目尾上菊五郎丈の最初の女弟子でした。西川鯉三郎先生とは兄弟弟子、花柳流ともご縁が深く、独立して創作舞踊を作りたいとの思いから、五條流を創設しました。私は先生と母から稽古をつけてもらって幼い頃から舞台で踊り、小学5年生で「鷺娘」、中学2年生で五條流の名取になった翌年「京鹿子娘道成寺」を踊りました。「鷺娘」を踊った時は、お客様から「ぜひ息子のお嫁さんに」と声をかけられたこともありました（笑）。幼少期から学生時代にかけては、毎月のように日本舞踊の公演がある時代で、楽しいお稽古ごととして続けていました。

「鷺娘」の衣裳で

左から五條園美さん、二代目家元五條詠昇師
五條雅之助師（現家元　三代目五條珠實師）

創作の道へ、山路曜生先生との出会い

子どもの頃は、プロの日本舞踊家になろうとは思ってもみませんでした。当時、女性は短期大学を卒業し、少しお勤めして結婚するか、4年制の大学を卒業してすぐ結婚するのが一般的でした。私も、南山大学文学部仏文科を卒業した後、学生時代からお付き合いをしていた方と結婚しました。一人娘だったため実家で両親と同居しながらの結婚生活で、当時はお手伝いさんがいる恵まれた環境でした。息子と娘、2人の子どもに恵まれましたが、その後お手伝いさんが退職。慣れない家事に奮闘しながら、舞踊を楽しんでいました。しかし、34歳の時に子どもの手が少し離れて、ふと、これからの人生何をしようと考えた際、自分に出来ることは日本舞踊しかないと思ったのです。当時は今のようにテレビが普及しておらず、娯楽として踊りが身近にあったため、大人になってからも舞台に立つことは何度もありましたが、本格的にこの世界に進むことを決意しました。以前、工藤流リサイタルに出演した際にお稽古を見せていただく機会があり、工藤扇寿さんと相手役の西川右近さんの熱のこもったお稽古に感銘を受け、私もリサイタルを開きたいとの思いを強くしました。

そこで、幼少期より出演していた「金城おどり」のご縁で可愛がっていただいていた、日本舞踊家の山路曜生先生にご指導を仰ぎました。これまで色々な娘役を踊ってきましたが、第1回リサイタル（1981年6月21日）では、私が思い描く恋を等身大で演じたいと、小説家の宇野千代先生の作品をベースに「薄墨桜」を創作しました。私が桜の精、山路先生には皇子として相手役を務めていただきました。山路先生の舞台の演出や、お聞かせいただくお話の全てが素晴らしく、とにかく近くで学びたい！そんな思いでいっぱいでした。

山路先生と踊った「薄墨桜」

毎年開催、リサイタルはライフワーク

第8回のリサイタルまでは、山路先生とご一緒させていただきましたが、些細な行き違いから、先生との距離ができてしまいました。山路先生から離れた不安で、涙がこぼれる毎日でしたが、第9回のリサイタルからは、自分ひとりで何から何までこなすようになり、文字通り“リサイタル”での開催となりました。

私は娘役の舞踊家ですので、お相手は男性の舞踊家にお願いすることが多く、時には若手、時には先輩と、多くの舞踊家のみなさまとご一緒しました。第5回では現代舞踊家の方々とも共演させていただきました。日本舞踊だけではなく、様々なジャンルの舞踊家の方とご一緒させていただいたことで、創作への益々の意欲や世界観、人脈も広がっていきました。

第5回リサイタル　創作「時の悪戯」（1986年6月14日）
古川隆一さんと共演

私のリサイタルの柱は「創作」と「古典」の二本立て。古典では、ご縁が深い人間国宝・常磐津一巴太夫先生に何度もご出演いただき、舞台を支えていただきました。

そんな折、第11回リサイタルで、創作舞踊「風神雷神の図」（1994年7月23日）にご出演いただいた西川菊次郎さんと山路先生が親しく、久しぶりに山路先生がリサイタルを観にいらしてくださいました。先生から「とっても良かったよ!」と声をかけていただいた時は、なんだかほっとしました。あの時先生と距離が生じたことは「私から離れて1人でやってみなさい」という先生からのエールだったのだと、今では思っています。

五條流許しもの「義太夫日高川」
（1997年、国立劇場　珠實会）

一巴太夫先生の思い出
我が家が人間国宝の稽古場に

常磐津一巴太夫先生には、名古屋での活動拠点として、およそ30年にわたり我が家を宿舎にしていただきました。中部芸能タイムズの主幹だった西脇和義さんが一巴太夫先生の芸に惚れて「ぜひ名古屋でお稽古場を開きたいので、弟子になりたい人を探している」と、内田流宗家・内田るり子先生や私の母に声がかかり、弟子入りすることになりました。この時、名古屋での稽古のための稽古場代や宿泊代が大変だ、という話を聞いた母が「稽古場もお宿もうちではいかがでしょうか?」と提案したのがきっかけで、我が家が一巴太夫先生の稽古場兼宿舎になりました。

離れの稽古場でお稽古が始まり、先生の素晴らしい浄瑠璃を聞くのがとても楽しみでした。でもそれ以上の楽しみがあったのです。お弟子さんが帰った後、先生はご自身の作曲のお稽古をされるのですが、漏れ聞こえてくる小さな声が本当に素敵で、お宿を提供している特権だと思い、廊下でひっそりと聴かせていただきました。その美しいお声は今でも忘れられません。

常磐津一巴太夫先生と

新たな挑戦!「カルメン」の演出・振付で
プロ意識を培う

セントラル愛知交響楽団創立20周年公演として企画された「文楽様式による『異説・カルメン情話』」（2003年11月20日初演）の演出・振付を担当する人を探しているとのお話があり、プロデュースと指揮を担当していた松尾葉子先生とお会いすることになりました。松尾先生は、オペラ「カルメン」の登場人物に日本の着物を着せて作品を創りたいとおっしゃるので「日本舞踊はそんなに簡単なものではないから難しいと思います」とお伝えしました。すると「人形浄瑠璃とオペラを組み合わせ、歌い手が文楽の人形のような動きで人形浄瑠璃のように演じる舞台にしたいと思っています。義太夫や三味線も依頼する予定です」とおっしゃいます。そこで「人形振りなら様になるかもしれませんね」と口にすると、松尾先生から「五條先生に決めました！お願いします」と演出と振付をオファーされました。松尾先生とは初対面でしたが、意気投合し、お引き受けすることになりました。

そこから、時代設定を近松門左衛門が活躍した江戸時代中期としてカルメンの物語を置き換え、オーケストラとソリストたち、義太夫と人形遣いの役をどのような形でコラボレーションさせるのか、大変ながらもワクワクする毎日でした。人形遣いの役には気心の知れた舞踊家の方にご出演いただき、各ジャンルの皆様のご尽力もあって舞台は大成功。名古屋だけでなく、東京などで5公演を開催することができました。

西洋音楽の方々が使う立派な劇場に、演出家として与えられた楽屋の広さ、指揮の松尾先生はじめ、ソリスト、楽団の方々の舞台に向き合う姿勢や、プロ意識に感心しきりでした。なにもかもが初めてのことで、日本舞踊や邦楽をはじめとする伝統芸能の公演と全く違うことに驚きと発見がたくさんありました。「カルメン」のおかげで、世界が広がる素晴らしい経験をさせていただきました。

文楽様式による「異説・カルメン情話」（演出・振付）

プロデュース・指揮の松尾葉子先生、セントラル愛知交響楽団と

芸能集団「創の会」を発足

新型コロナウイルスの感染が拡大する少し前から、リサイタルのようなプロの公演や、おさらい会の減少、お弟子さんの減少など、日本舞踊界が全体的に低迷していることを肌で感じていました。何か新しい発想で出来ることはないかと思っていた頃、元NHKエグゼクティブプロデューサーの

伊豫田静弘さんと出会いました。伊豫田先生が演出する舞台を観て、この方となら何かができると思い、お力を貸していただきたいとお願いし、芸能集団「創の会」を2019年に立ち上げました。

創の会は、舞踊家だけでなく、同じ志のある演奏家や地元の演劇人にも参加してもらい、新しい伝統芸能公演を創ることを目指しています。今までとは違う客層のお客様に観てもらう公演を創り、観客の裾野を広げようと、大きな公演としては「創作舞踊劇『名古屋城天守物語』」（2020年12月12日、13日）、「創作舞踊劇『幻想 平家物語』―笛が鳴る　誰を偲びて笛が泣く―」（2023年6月3日、4日）の2公演を開催しました。

創作舞踊劇「名古屋城天守物語」
舞台あいさつの様子
（写真左・伊豫田静弘さんと）
©Kazuma Sugihara

創作舞踊劇「名古屋城天守物語」芸能集団「創の会」
©Kazuma Sugihara

もともと日本舞踊家は台詞を話したり、芝居をしたりという経験が豊富ではありません。一方で、演奏家は現代的な表現の歌詞に節や三味線の曲をつけるのに苦戦するなど、異なる分野の方との創作活動は思うように進まないこともあります。各ジャンルで色々な工夫や稽古を重ねて、舞台を創っています。また次世代を担う若い世代の方々にもスポットが当たるように、重要な役どころを経験してもらいたいと思っています。2023年度名古屋演劇ペンクラブ賞の受賞の際には「幻想 平家物語」で新しい舞踊劇の可能性を追求したことを評価していただきました。これからも様々なジャンルを織り交ぜながら、伝統芸能の世界を広げていきたいと思っています。

次世代へのバトン　若手舞踊家の育成

毎年開催していたリサイタルで、少しずつ弟子たちに役を渡していったのがきっかけで、2008年より「桜美（おうみ）の会」がスタートしました。弟子たちは着実に力をつけ、次第に主要な役を踊りたい、主役を踊りたい、自分たちの創作作品を創りたい、という要望を感じるようになりました。そんな思いが形になって公演を行うようになり、第6回桜美の会「舞踊三態～日本の四季によせて～」（2019年11月23日）では、2019年名古屋市民芸術祭賞をいただきました。

第6回桜美の会
「舞踊三態～日本の四季によせて～」

市民芸術祭賞授賞式会場で

「桜美の会」の活動以外にも、長女の麗をはじめ弟子たちの意欲的な活動が増えてきました。母校で日本舞踊部を発足させ、単独のリサイタルを開催する弟子、またお寺に嫁ぎ、本堂に子どもたちを集めて、日本舞踊のワークショップを開催する弟子など、日本舞踊の輪を広げてくれていることは嬉しい限りです。

私は南山短期大学で20年、名古屋芸術大学で10余年、非常勤講師として日本舞踊を学生たちに教えてきました。若い世代の方々に日本舞踊を経験してもらい、日本に素晴らしい文化があることを誇りに思ってもらえるよう、様々な角度から日本舞踊を広げ、次世代の舞踊家たちにバトンタッチしていきたい。それが今の私のライフワークです。

筆者が「家庭を守りながら日本舞踊家として一線で活躍することは、並大抵ではない努力が必要なのに、軽快なフットワークで軽々とこなしているようにお見受けします」と申し上げたところ、「出稽古から疲れた顔で帰ってくると、母から『家に不機嫌を持ち込まないで』と叱られるから『なるほど』と思い、喫茶店でクールダウンして笑顔で帰宅していたのよ」とのこと。精力的に活動しながら朗らかな笑顔を絶やさない五條さんですが、家庭や仕事など何かを両立させて取り組む人なら、だれもが共感できるこのエピソードがとても印象的でした。

日本舞踊の魅力や可能性を発信し続ける五條さんの活動からは、今後も目が離せません。2024年12月14日、15日には名古屋能楽堂けい古室にて芸能集団「創の会」が主催する「日本舞踊と邦楽で楽しむ平家物語」（仮）が上演されます。ぜひ足を運んでご覧いただきたいと思います。

Report
視点

アール・ブリュットの時代
～福祉レジームとアール・ブリュットの成立～

昨今、アートシーンの流行り言葉に「アール・ブリュット」があるが、日本では一般的に「アール・ブリュット=障害者アート」と受けとめられており、極めて差別的な印象を受ける。これは福祉の側面から誤訳されて発信された言葉であり、アートの側面からは修正しようと試みられているように感じる。長年、この分野で活動してきた筆者としてその謎解きをしてみた。

（まとめ：鈴木敏春）

日本での障害者アートの流れ

1928（昭和3）年に、久保寺保久が知的障害児施設八幡学園を千葉県東葛飾郡八幡町（現：千葉県市川市）に開園した。久保寺は、教員経験から問題行動を起こす子どもたちの中には知的障がいのある子もおり、適切な教育と保護の必要性を感じたのだった。施設では「踏むな、育てよ、水をそそげ」の理念のもと、障がいのある多くの児童に美術教育を行なった。後に「裸の大将」として親しまれることになる山下清は、八幡学園に入園しており、彼の才能が開花したことも、この施設の美術教育の賜物であった。

1946（昭和21）年には、“日本の障がい者福祉の父”とも呼ばれた糸賀一雄と池田太郎、田村一二により、戦災孤児や知的障がい児を収容する近江学園が滋賀県に設立され、1948（昭和23）年には、児童福祉法の施行に伴い、県立施設となった。糸賀が語りかけた「この子らを世の光に」という言葉は「子どもたちは自ら光り輝く存在であり、それを支えていく」という思想であり、師の京都帝国大学（現：京都大学）出身の教育学者・哲学者である木村素衛の著書『表現愛』から深く影響を受けている。久保寺や糸賀達の取り組みは、障がい者による表現活動の先駆けとなった。

1954（昭和29）年、美術評論家・瀧口修造により『美術手帖』10月号にて、日本で初めて「ラール・ブリュ」（アール・ブリュット）という言葉が紹介された。なお、全国各地を放浪していた山下清の行方を捜す記事が朝日新聞に掲載されたのをきっかけに、山下清ブームが起こったのもこの年だった。

時を経て、2004（平成16）年、滋賀県近江八幡市に昭和初期に建てられた町家を改築した、ボーダレス・アートギャラリーNO-MA（現：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA）が開館した。このボーダレス・アートという言葉には、障害者アートだけにとらわれず、様々な表現を分け隔てなく紹介するというコンセプトが込められており、施設設立にあたって生み出された造語である。後に、同様のコンセプトを掲げた美術館が全国各地に開館されていくことになる。

愛知県での障害者アートの流れ

1952（昭和27）年、名古屋市立菊井中学校特殊学級に川崎昴が美術教師として着任した。後に「虹の絵師」や「第二の山下清」と呼ばれる山本良比古は、当時この学校に通学しており、知的障がい、難聴、言語障がいがありながらも、川崎から画才を見出されたことにより、才能を伸ばす。1960年代には、マスコミでも報道され、山本の精密な点描画と原色の華やかな画風は話題となった。山本は一時、絵を描くことから離れていたが、晩年は制作意欲が復活し、再び筆をとっていた。2019年には、高浜市やきものの里かわら美術館で企画展「山本良比古 - 緻密な風景を描いた“虹の絵師”」が開催された。企画展を担当したキュレーターの今泉岳大は「彼の絶筆は未完となった『皇居二重橋』でしたが、画面上に置かれた原色の筆跡は彼の誠実な人柄が偲ばれます」と述懐した。川崎は、その後1970（昭和45）年に社会福祉法人ひかり学園を設立するなど、生涯、障がい者支援に尽力した。

川崎昴先生と山本良比古さん

山本良比古さん 制作風景

山本良比古「ミラノ・ドゥオモ聖堂」1982年油彩

岡崎市の障害者支援施設藤花荘では、1986（昭和61）年に施設内で工芸や陶芸制作を行う工芸班（現：絵画陶芸班）が設置され、安藤昇、森慎吾といった陶芸家として活躍する人材を橋爪彩子が指導した。橋爪は個性や感性を尊重し、絵画や音楽などを取り入れた教育を実践する静岡県の社会福祉法人ねむの木学園に感銘を受け、愛知県立芸術大学工芸科を卒業後、藤花荘の絵画陶芸指導員を務めたが、2006（平成

18）年に39歳で急逝した。その後も安藤たちは創作活動を続け、2009（平成21）年には「境界なきアート展～響きあうココロへ～」（キュレーター：森田靖久、鈴木敏春）が豊川市桜ヶ丘ミュージアムで開催された。安藤と森の陶芸作品は、おかざき世界子ども美術博物館にて開催されている特別展「安藤昇と森慎吾のやわらかいかたち-世界は土でできている」で2025（令和7）年3月9日まで見ることができる。

2007（平成19）年「第1回ふれあいアート展」が名古屋市民ギャラリー矢田で開催され、翌年からは電気文化会館 東ギャラリーで毎年開催されている。一般社団法人愛知県知的障害児者生活サポート協会が主催し、この作品展を通して才能を開花させ、制作活動に励む多くの作家が生まれている。

第11回ふれあいアート展開会式

2012（平成24）年「彫刻を聞き、土を語らせる 西村陽平展　西村陽平が出会った子どもたち展」が愛知県陶磁資料館で開催された。千葉県立千葉盲学校の教師であった西村と生徒たちの、陶芸を通した出会いは見る人に感動を与えた。また、2016（平成28）年の第16回全国障害者芸術・文化祭あいち大会では、プレイベントとして愛知県立芸術大学サテライトギャラリーで西村陽平と生徒たちの作品を展示した。この作品展が愛知県立芸術大学での交流事業のきっかけとなり、以後毎年、障がい者支援活動をしている卒業生らの活動をシンポジウムなどを通して大学で紹介するようになった。なお、この2016年の大会では、安藤昇の陶芸作品「虎」がマスコットとして採用されている。

安藤 昇「虎」
（第16回全国障害者芸術・文化祭あいち大会）

2014（平成26）年、愛知県障害福祉課が「あいちアール・ブリュット展」を名古屋市民ギャラリー矢田で開催し、以後、毎年開催している。この「あいちアール・ブリュット展」にもたびたび出展している小寺良和の陶芸作品や、升山和明のコラージュ作品は、2022（令和4）年の国際芸術祭あいちで招待作家として展示された。

名古屋市では、毎年、世界自閉症啓発デーの4月2日から8日まで発達障害啓発週間として市内各地で取り組みを行っている。企業や大学、公共施設等が協力し、多様な価値観や自由な発想のもとに展覧会やグッズ販売などを行い、商業空間でもアール・ブリュットを取り入れる様々な活動が見られる。2024（令和6）年には、名古屋市が、市内に本社を構える竹田印刷株式会社に運営を委託し「発達障害啓発プロジェクト作品展」を4月12日から25日まで名古屋造形大学ギャラリーにて開催した。竹田印刷は創業100周年を迎える老舗ながら、アール・ブリュット作品を用いた企画・デザインを積極的に取り入れる新たな取り組みを展開し、作家たちに活躍の場を提供している。

発達障害啓発プロジェクト作品展
（名古屋造形大学ギャラリー）

2024（令和6）年には、愛知県と名古屋芸術大学、名古屋造形大学、愛知県立芸術大学との間で「あいちアール・ブリュット」の取り組みを推進していくために「愛知県と県内3大学との障害者芸術文化活動の推進に関する協定」が締結された。同年6月には、名古屋芸術大学で「愛知県×名古屋芸術大学連携事業 あいちアール・ブリュット作品展」を開催した。

2024（令和6）年4月に民間企業の障害者法定雇用率が2.3%から2.5%へ引き上げられ、2026（令和8）年7月には2.7%へと段階的に引き上げられた。愛知県では「アート雇用」をハローワークとともに進める取り組みを始めている。

当事者運動と当事者研究の流れ

「アール・ブリュット」が提起した課題は、雇用や生活といった現実社会における課題に取り組む当事者運動から、個々の障がい者を尊重するための当事者研究へと深化している。その関連から多くの表現活動が生まれた。「アール・ブリュット」は元々、フランスの現代美術家ジャン・デュビュッフェが提唱した。デュビュッフェは、精神障がい者が制作した作品は、精神の深淵の衝動が生のままでむき出しに表出された“生（き）の芸術”（アール・ブリュット）であり「芸術的教養に毒されていない人々が制作した作品」と定義した。それは、日本のように福祉の側面から提起された障害者アート＝「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」を意味していない。現に、障がいの分類もよりきめ細かくなっており、社会的・時代的背景のためか、公募作品の多くは精神障がい者によるものになってきている。近年、福祉の側面からの誤訳に始まった表現活動は、様々な問題を抱えた社会に向き合うアートを生み出しつつある。正に「アール・ブリュットの時代」である。（文中敬称略）

#zoom up
ズーム・アップ

歌人 野口(のぐち)あや子(こ)さん

短歌と共にどこまでも

写真：三品鐘

野口あや子さんは東海地方を拠点に活動されている歌人。19歳で短歌研究新人賞を、23歳のとき第一歌集『くびすじの欠片』で現代歌人協会賞を、どちらも異例の若さで受賞され鮮烈なデビューを果たしました。その後も音楽や映像等、他ジャンルとのコラボレーション、AIや歌舞伎町のホストが短歌を詠むプロジェクトへの参加、オンラインでの短歌レクチャーや大学で教鞭をとられるなど、短歌シーンを牽引されています。

（聞き手：黒田杏子）

図書館に通った幼少期

私は岐阜県岐阜市の出身で、田んぼに囲まれて育ちました。近所に本屋はなかったのですが、父も本が好きで、幼稚園の頃から図書館に通っていました。いつも貸出冊数の上限いっぱいまで本を選んで、足りないときは父の分まで借りたりしていましたね。今思えば早熟な子どもで、小学校高学年の頃は、山田詠美や江國香織の小説を読んでいました。一番夢中になったのが、“エロい本”が読みたくて（笑）、たどり着いた瀬戸内寂聴の『女人源氏物語』でした。当時から何かを書きたいという気持ちはありました。小学校6年生の時には、文通相手に自作の漫画をコピーして送っていましたね。それがなかなか社会派の漫画で、ネパールの「少女神クマリ」信仰から着想を得たものでした。邪馬台国の卑弥呼が生き神だったという設定で、心を失ってしまった卑弥呼が近未来から来た男の子と出会うことで、だんだんと感情を取り戻して、真の女王になっていくという物語でした。

3歳頃の野口さん

短歌との出会い

中学生の時、父の本棚で俵万智さんの『サラダ記念日』を見つけて、自分もこういうものを書きたいと思いました。その頃、私は自身の悶々とした暗い気持ちを日記と詩に書いていましたが、際限なく延々と書けてしまうんです。でも、短歌には五七五七七という枠がある。それが自分の気持ちの整理をするのによかったのかもしれません。

高校を中退して暇になり、短歌雑誌に載っていた岐阜の結社「幻桃短歌会」に電話をかけて、それまで書き溜めていた短歌を持っていきました。当時、代表を務めていた松村あや先生は優しくてきっぷのいい方で、定期的にケーキを食べながら私の悩みを聞き、短歌を見てくれました。結社では、私の次に若い方が65歳でした。先輩方が「この子は伸びしろがあるぞ」と目をかけてくださって「描写に落とし込む」とか「定型を守る」とか、いろいろなメソッドを教わってガンガン書いて。短歌研究新人賞を受賞した連作「カシスドロップ」は皆さんに育てていただいた賜物だったと思います。その後「未来短歌会」にも入会し、加藤治郎先生に師事しました。最初の頃に「野口さんは長距離ランナーだよ」と言われたのを覚えています。だから多分あまり構えずに、長く続けられたのかもしれません。他のことをやっていても、まあこれを歌に詠めばいいかと思えるんです。

短歌研究新人賞と現代歌人協会賞の受賞の際、年齢で話題になったことについては、やはり少しアンビバレントな感じはしていましたね。それを売り物にされるのは嫌だなと思ったし、でも貴重なタイトルだなという気持ちも両方あって。やっぱり「若い感性を期待しています」と言われると、じゃあ技術で返そう！みたいな、負けん気はありましたね。

大学は、愛知淑徳大学の文化創造学部（現：創造表現学部創作表現専攻）に進みました。シナリオや批評、広告など、さまざまに「書く」ことを学ぶ学科でした。本当は短歌をやる気で入ったんですけど、未来短歌会の加藤先生が「せっかく大学に行くなら他のこともやったら」とおっしゃられたことに触発され、3年生からは小説家の諏訪哲史先生のゼミに入りました。諏訪先生が担当していた「小説表現史」の授業がすごく面白かったんです。小説は今も練習をしています。私は、基礎を固めるというのを大事にしていて、短歌もまず、描写、定型感、字あまり・字足らずの必然性など、基礎をしっかり叩き込まれたんです。基礎がないまま自由気ままに書いても、結局、短距離ランナーになっちゃう気がするんですよね。

東広島イノベーションラボミライノ
「五七五七七で学ぶ『こころ』の掴み方」講師（2021年）

短歌を世界に届けたい

私は、以前より短歌を海外に広めたいという願いを持っています。2016年、フランスのパリとリヨンで短歌を朗読した経験から「コンビニ」とか日本人にしか通じないことを歌ってもつまらないなと感じました。もっと普遍的なテーマを歌おうと思って詠んだのが、第4歌集『眠れる海』でした。以降も、海外に行ける技術やタイミングを得ようと、着物を着たり、和歌のことを勉強したり、短歌のことを説明したりコミュニケーションがとれるように英語の勉強を続けています。2023年には、歌人で和歌研究者の御手洗靖大さんと一緒に、台湾でパフォーマンスをしました。2024年の春にも、欧州と日本のアーティストを繋ぐイベントに参加してアピールしてきました。

『眠れる海』朗読ライブ（2017年）

台湾詩節祭にて御手洗靖大氏とのパフォーマンス（2023年）

最近はラップにも挑戦しています。きっかけは、雑誌『現代詩手帖』に掲載された都築響一さんと佐藤雄一さんの対論「ヒップホップというリアル」でラッパーのTOKONA-Xが引用されていて、バースが五七調でできているというところで興味が湧いたことです。今は、路上でサイファーをするチームにも参加しています。10代・20代が中心で、私と同じく学校に馴染めなかったりしている人も多い。20歳くらい年の差はありますが、私は不登校の経験者として伝えられることもあるし、チームのメンバーからはラップの技術を教えてもらえます。今度、ラップバトルのイベントにも出るんですよ。バトルはリスペクトを込めてディスる（批判する・けなす）というのが基本で、それは短歌の批評にも共通する感覚です。批評はテキストと向き合ってやることだから、批評がないということは、ディスもないしリスペクトもない。批評とディスは似ていると思います。

短歌の現在

私が始めた頃より、現在の短歌の世界は明るくクリアな感じになったなと思います。ただその分プレーヤーが大勢いるので、その中で、自分がどうしていきたいかという悩みを抱えている人が多いかもしれません。でもみんな願望に忠実になりましたね。歌集の帯文は誰に書いてほしいとか、短歌で憧れの人と何がしたいとか、どこの雑誌で書きたいとか。それは、私にとっては居心地がいいことです。

今後やってみたいことは、短歌と和のプロダクトを創ることです。「お香と短歌」とか「着物と短歌」とか。相性よさそうですよね。また、私は名古屋ゆかりの歌人、春日井建さんの研究をしているのですが、春日井さんの歌集『友の書』のような、いろいろな関係性を描いた歌集を出したいと思っています。私の作品は、特定の“誰か”への想いを詠んだものが多いので、すべて恋愛の歌と捉えられがちなのですが、実際にはそうではありません。恋愛や友情といった枠には収められないような、多様な人と人との間にあるものを書きたいと思っています。

『くびすじの欠片』野口あや子・著（短歌研究社・刊）
現代歌人協会賞を受賞した第一歌集。短歌研究新人賞受賞作「カシスドロップ」を含む311首が収録されている。2024年文庫化。

令和6年9月25日発行（年4回6・9・12・3月の25日発行）通巻411号　編集発行／公益財団法人　名古屋市文化振興事業団　〒460-0008　名古屋市中区栄三丁目18番1号　TEL(052)249-9385　FAX(052)249-9386　HP　https://www.bunka758.or.jp/

なごや文化は寄附でもつ

NAGOYA Culture Fund

名古屋市文化基金

支援・育成事業

― 市民やアーティストによる文化芸術活動を支援・育成 ―

参加・体験事業

―市民だれもが参加できるワークショップ・公演等を実施 ―

鑑賞事業

――― 優れた舞台芸術を鑑賞する機会を提供 ―――

市民文化の情報発信

― 情報誌の刊行などを通して、様々な文化情報を発信 ―

皆さまからいただいた寄附金を活用し、なごや文化創造のための様々な事業を展開しています！

名古屋市文化基金の詳細および寄附のお申込みはこちら

ご寄附に関するお問い合わせ

名古屋市観光文化交流局
文化芸術推進課
TEL 052-972-3172

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL 052-249-9390

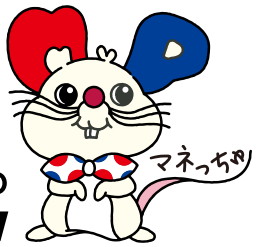
頼もしい味方をお探しですか？

集客・販促プランナー　アートディレクター　印刷コンサルタント

駒田印刷株式会社　TEL(052)331-8881
〒460-0021　名古屋市中区平和2-9-12　http://www.kp-c.co.jp

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容
①舞台の企画・制作マネージメント
②イベントの企画制作
③芸術団体のコンサルティング
④舞台・イベントの運営



MANAGEMENT PRO
株式会社マネージメント・プロ

〒461-0004　名古屋市東区葵2-11-22　アバンテージ葵ビル301
TEL：(052)508-5095　FAX：(052)508-5097　Web：www.mane-pro.com　E-mail：mane-pro@mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行
※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM等にて配布

デザイン・印刷／駒田印刷株式会社